日本プロレタリア文学集・19

本プロレタリア文学集・19

「戦旗」「ナップ」作家集 6

日本プロレタリア文学集・19
「戦旗」「ナップ」作家集 (六)
定価 二六〇〇円
一九八五年一月二十五日 初版
発行者 松宮龍起
発行所 株式会社 新日本出版社
〒151 東京都渋谷区本町一の八の七
電話 (〇三) 三二〇—七一一一
振替 東京 三—一三六八一
印刷所 光陽印刷株式会社
製本所 みさと製本印刷株式会社

第八回配本

落丁・乱丁本がありましたらおとりかえいたします。
本書の内容の一部または全体を無断で複写複製（コピー）して配布することは，法律で認められた場合を除き，著作者および出版社の権利の侵害になります．小社あて事前に承諾をお求めください．

日本プロレタリア文学集・19

「戦旗」「ナップ」作家集 (六)

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

渋川驍

倉庫を渡る少年……二
難破船……一九
手蹟……二九

長沖一

夜……四九
母子一景……五四

丸山義二

拾円札……六九

地主の正体……八〇

秋田　実

嘘……八七
犬……九一

那珂孝平

情報集……一〇五
サンマ流し……一一八
少年労働市場……一二三
貯金局員……一四七

荒木　巍

芽……一六三
火花……一七四

再建……一八〇

堀田昇一

奴隷市場……二〇三

冬近く……二八四

貨物船……二九七

黄色十字弾……三五二

森山啓

何も有たぬ男……三六三

火……三七六

松隈研二

露台へ！……三九三

新田　潤
船の挿話……四〇三
三好十郎
ごくつぶし……四一五
猪野省三
山峡の動き……四四一
木村良夫
嵐に抗して……四四九
水町三郎
文七兄妹……四六九
神田錦三
未組織工場へ……四七九

解　説……佐藤静夫…五〇一
発表年月日と掲載文献……五二三

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

渋川　驍

倉庫を渡る少年

浚渫(しゅんせつ)船が重苦しい音をひびかして、たえず奇怪な動作をくりかえす。周囲には、巨大な汽船が、数隻、鋼鉄の壁を不規則に立てめぐらしている。その各々のすそに、貝殻のように数箇の小舟が附着して、クレーンによってデッキから落される貨物を、体一ぱいの口で咀嚼(そしゃく)している。たそがれが近い。冬だ。マストにとまったセーラーの姿が次第にぼやけて、ただ、癇だかい叫び声が空中にうそ寒く反響する。

岸壁の近くに身を横たえた外国船の腹に、数人の労働者が固って、和船につんできた石炭を威勢よく投げこんでいる。あたりの海面一帯はこぼれ落ちた石炭のために油ぎって、光っている。汽船のサイレンが港のすみずみから、今や、感傷的な声を送ってくる。小さな伝馬が気ぜわしく、蟻のようにはいまわっている。それらを蹴散らし、あまたの汽船の間を巧みに縫って、小蒸気が入り乱れて駆けて行く。

その一つが巨船のかげからあらわれて、第三岸壁に近づいてきた。

「へッ、またのろけか。」先端に立って、ロープを手にクルクル廻していたセーラーがエンジン・ルームの中にどなった。

「のろけ！　バカいえ！　おまえにもご馳走してやろうと思って言ってやっているのにふざけるない！」船底からの声だ。

「ホ、その女がかい？　どこだ？　教えろよ。」

「それみろ！　今夜おごるならね。」

「すぐそれだ。何というあさましい奴だ。」

「どっちのことだい。おごっておいて損にはなるまいぜ。」

小蒸気はしだいに速力をゆるめた。止った。ロープがセーラーの手をはなれて、陸にとんだ。まっさきに、セーラーがデッキから岸壁にうつった。つづいて、エンジン・ルームから相手の男が油によごれた顔をあらわして、舷側をまたいだ。

船の後尾のデッキに尻をすえて、走りさる港の風景を眺

めていた健三は身をおこして、左舷にまわった。岸壁へ飛び上ろうとした。その時、どうしたはずみか、彼は足をふみはずして、海面によろけた。両足が水面に飛沫を投げて、とびこんだ。けれど、辛うじて彼はデッキのふちに取りすがった。

「何だ、そのざまは。それでセーラーと言えるかい。」

頭の上で冷笑的な声がおこった。見上げると一人のうす汚い少年がつったっている。思わず健三は、ふがいなくも顔を赫らめてしまった。が、それを押しかくすように、彼はあわてて言葉を投げかえした。

「やかましい！　あめ小僧！」

健三はいそいでデッキにはいあがった。

「腹が立ったのか。腹が立つぐらいなら、も少し注意していろ！」

生意気な少年である。しかし、やがて落ちつきをえた健三は、その生意気な言葉が、十四五歳ばかりの少年の口から出たことを思って、急におかしくなってしまった。と同時に、とっさに弾じきでた急激な感情がいそいで身を縮めた。歯を怒らして飛びかかってくるが、けっして咬みつくことのない小犬の相手でもするような寛大な感情がそれに代った。

「そいつはまいった。だが、俺はセーラーじゃないんだぜ。」

「そうか。それにしたって、あんまり、みっともいいものじゃなかろうぜ。」

「そういうな。カミナリさまでも時にはふみはずすこともあらあ。」

「へ、うまいことを言いやがるな。はっ、はっ、は、は！」少年は顔をくずして笑った。その笑顔は大人らしく見せようとする彼の努力にもかかわらず、いかにも子供らしかった。

健三もつりこまれて、一しょに笑った。彼は革帯をといて、ぬれたズボンをぬいだ。両手で堅く水を絞った。少年はその様子を、しばらく立って眺めていたが、やがて、岸壁のハシに腰をおろして、足をその下にブラさげた。

「兄き、お前はいったい何の仕事をしているんだい。」少年が健三に声をかけた。

「俺か？　俺は造船所の職工だよ。だが、お前はこの辺で何か働いているのかい。」

「働くには働いているさ。」

「何をやっているんだ？」

「何でもやるぜ。だが、近頃二三日ははぐれているがね。」

「お前には親爺はないのかい？」
「あるにはあるさ。が、俺の本当の親じゃないんだ。おっ母は生みの親だが、家にも子供がゴロゴロしているんだから、俺が家にいりゃ、ずいぶん厄介ものさ。そんなところにいなくとも、俺たちには俺たちの自由な家があらあ。」
「お前の家というのはこの近所なのかい。」
「この岸壁が俺たちの家なんだよ。」
「俺たちというのならお前一人じゃないんだな。」
「そうとも。自由の好きなのは俺一人じゃないんだからな。」
「どこにねるんだ？」
「ねどこはいくつでもころがってらあ。」少年は岸壁に立ちならんだ倉庫の一群を指さした。「俺たちはここらの様子なら鼠の穴までチャンと心得ているんだからな。」
「ふむ。」
健三はズボンの皺をのばして、ゴムタビのままの足をつきこんで、革帯をしめた。そして、足早にデッキを伝って、岸壁へとびうつった。少年も同時に立ちあがった。
「仕事にはぐれたりした時にはお前たちはどうして飯をくうんだい。」歩きながら健三は少年に話しかけた。
「そんなことは心配ないさ。俺たちの取ってくる金は自分一人の財産じゃないんだからな。それに、仲間みんなが仕事にありつかれないなんて、滅多にあるもんじゃないよ。」
「警察からにらまれるようなことはないのかい。」
「しょっちゅう、にらまれてるさ。彼奴ら、人に仕事も見つけてやることもできないくせに、よくつべこべぬかしやがって、ほんとに生意気なやつらだよ。だが、いくらあいつらでも、俺たちから寝床まで奪うことはとてもできまいよ。」
少年はそういいながら、コンクリートの上に落ちたガラスのかけらを、一枚、拾いあげた。それを全身の力をこめて海面に平行にほうりなげた。ガラスは夕靄（ゆうもや）の中に微かな反射を残し、海面を二三度ったって、沈んだ。
その時、つみかさねられてある鉄管の向うで、声高に叫ぶ四五人の労働者の声が、とつぜん、二人の耳にきこえてきた。
「爺さん、たいていでよしてくれろよ。何べんここにやってくるのだい。」
「そう何度も買えるものか。」
「あんまり、お前は虫がよすぎるぜ。」
彼等の前に、陽にま黒く焼けた、干からびた大根のような一人の老人が、駄菓子のはいっているブリキ箱を肩にか

けて立っている。
「あしたきな。その時また買ってやるから。」
「きょうはほかのところにまわって行ってくれろよ。」
「買ってやりたいのは山々だが、俺たちだって可哀いそうなんだからな。」
老人は黙ったまま、表情の抜けた、憂鬱な視線を地上におとしていた。
「爺さん！」少年がとつぜん叫んだ。「こっちにおいで！」
老人はキョトンとした目をあげて、呼ばれるままに、鉄管の山を廻って、冬眠した蛙のような頼りない足どりで二人の方にやってきた。
「兄き、買ってやれよ。いいだろう？　爺さん、たくさん残ってるのかい？　見せてごらん。」
少年は健三の承諾を当然なことでもあるかのように老人の、肩にさげた、ブリキの箱のフタをとりのけた。
「ずいぶん残ってるな。しかし、爺さん、俺たちだって、そんなに沢山買えやしないぜ。これだけもらっておこうよ。」
少年は手づかみに、駄菓子を数十箇取りだして、用意してある古新聞紙の一枚に無雑作につつんだ。
「兄き、金を払ってくれろよ。」おっかぶせるように少年が言った。
「いくらだい？　爺さん。」健三は我にかえったようにたずねた。
「はい、二十銭でございます。」
目をしばたたきながら、二三度老人は頭をさげた。
健三は汚れた鹿革のガマ口を取りだして、白銅を二枚、指にはさんだ。
「兄き！」少年は健三に駄菓子を渡しながら歩きはじめた。
「どうしてこう可哀いそうな人間ばかり俺たちの周りにいるのだろうな。畜生！　何といっても癪にさわらあ。」
「だから、しっかりしなければならないんだよ、俺たちは。」
だが、少年はその言葉にどうしてか答えなかった。今までの元気のよかった表情がすっかり消えうせて、何事かをじっと考えている様子だった。それで、健三もあとの言葉がつげなくなってしまった。二人は、駄菓子を機械的にむさぶりながら、一段と冷え行く、海気のたちこめた、生臭い夕もやの中を、しばらく、無言のまま伝って行った。
「兄き。」少年が思いだしたように口を開いて、横道にはずれた。「俺はここで失敬するぜ。残った菓子はもらっておいていいだろう？　俺は当分第三岸壁の近所にいるから、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com